堂中俳諧七部集

下

崇俵序

崇俵撰める孤屋那坡利牛とは常に芭蕉の軒に行
かよひ尾の窓をしらぬきゑ窓泉をくゝまりて十、ゐ有りなく
の文字の野風をとけ〻いへる輩さし寄落りあとのこゝれ
留せる秋あの二三字を席に付りて以桶にはけ崇世おこ
庵主これにはをかとけ宋人のまゝ舞(カヽ)らきといへる菜見
なるん　志のわ暑に塘のさゝやかなるを竪におき横に
みをしつゝ金屏の杏の古きにあらずとおのりと舌よりさらひ
いつゝ拝のこゝりに其に入りさくもうつるうのやうの
とものに見に蛇の十ゐくるけおや　これを思ひ立春の日の
乃つと出より秋の月にかしこれかとふけつゝやく此絵り
[illegible]あめつち春二まいにうちつとなん見を

奈良かよひおなしつらなる細基手　野坡
ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉
預けたるみそとりにやる向河岸　野坡
ひたといひ出すお袋の事　芭蕉
終宵尼の持病をおさへける　野坡
こんにやくはかりのこる名月　芭蕉
はつ雁に乗懸下地敷て見る　野坡
露を相手に居合ひとぬき　芭蕉
町衆のつらりと酔て花の陰　野坡
門で押るゝ壬生の念仏　芭蕉
東風々に糞のいきれを吹まはし　仝
たゝ居るまゝに肱わくの脇　野坡

江戸の左右むかひの亭主登られて　芭蕉
こちにもいれとから臼をかす　野坡
方々に十夜の内のかねの音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてたまつてねたる面白さ　芭蕉
ひらふた金で表かへする　野坡
むら室に女房の髪を梳て　芭蕉
又このはるもすまぬ牢人　野坡
法印の湯治を送る花さかり　芭蕉
なは手を下りて青麦の出来　野坡
どの家も東の方に窓をあけ　野坡
魚に喰あくはまの雑水　芭蕉

[illegible]一秋くに寒ふれる　此坡
未を乃きの　よそぬ[illegible]用　芭蕉
僕くも　志らせぬ　嫁をつれて来て　此坡
屋風の[illegible]に見いるくるしき　芭蕉

三吟

兼好も　莚織りけり　花さかり　岚雪
[illegible]や　苣に　鮎　[illegible]る　利牛
[illegible]ハ　妻乃小坂のうしまりて　此坡
外を　さまくに　国の　お樸場　岚雪
細くと　朝日　あろの　青が月　利牛
早稲も　晩稲も　おまに　出る　此坡

ウ
[illegible]をそき　流まのまたにん　岚雪
あちあちまれハ　畳のうれ　利牛
僕くら　笑と　嫁を　呼にくる　此坡
てうくしくも　参るうへにより　岚雪
黒谷乃のちハ　黒崎　聖護院　利牛
又百のうけを　二度に　取かり　此坡
網ぬきのいれ　嫁ぬる　言のうへ　岚雪
人のさいらぬ　[illegible]　なり　利牛
[illegible]役の　鞍を　[illegible]　此坡
[illegible]の中なる　芋をかる　月　岚雪
[illegible]と　両浮　やうして　[illegible]乃風　利牛
[illegible]　又　劉　[illegible]く　此坡

[illegible]くるし受顔は黒ぬりて　岚雪
抱揚る　[illegible]　小便をする　利牛
[illegible]と[illegible]内の[illegible]楊[illegible]　[illegible]　肥坡
[illegible]　著の[illegible]　岚雪
[illegible]　[illegible]　[illegible]　利牛
[illegible]　[illegible]　[illegible]　肥坡
金佛乃細き[illegible]　岚雪
[illegible]　[illegible]　利牛
黍乃穂[illegible]　[illegible]　肥坡
[illegible]場乃[illegible]　岚雪
[illegible]　[illegible]　利牛
今[illegible]　[illegible]　肥坡

ウ
[illegible]　岚雪
[illegible]　利牛
鎌倉乃[illegible]　肥坡
[illegible]　岚雪
[illegible]　利牛
[illegible]　肥坡

[illegible]

孤屋
[illegible]　芭蕉
[illegible]　[illegible]
[illegible]　利牛

芭蕉
孤屋
利牛
岱水
孤屋
芭蕉
岱水
利牛
芭蕉
孤屋
利牛
岱水
孤屋
芭蕉
岱水
利牛

名所のうちに合せるに少し炯　芭蕉
きらくいふて　いふに　蒼鼎　孤岳
ウ　さつ乃とろに　高に通りもうすに　利牛
山の根　際宮　鈍かきかなり　岱水
よこ雨らにそよく　風乃吹出　孤岳
晒のよこ　同さり　嘴　新　利牛
花見にて女子さうか　住れ立て　芭蕉
余乃こさ有しに　莖あんかく　岱水

百韻

子に裸に父にてまして　早苗飛　利牛
眷のいまらの　真白にさく　肥坡

雨にかり　珠数蛍鳩の時出して　孤岳
与力町より　むかに　西　かぶり　利牛
以干竹に　茶立乃　細さくりよせ　肥坡
一るち　鼓まして　つゝわく　人群　孤岳
暮乃月　二家乃　茹汁　まるさ　利牛
掃に跡　うら　檀　ちれかり　肥坡
ウ　ぢゝめき乃　中により　蛍るかれ　孤岳
坊うに　なまと　やまり　仁平次　利牛
松坂や　矢川へ　ちかるうら　通り　肥坡
吹ゝ　朕も　住しに　文　関に　孤岳
十二三年の　哀　雲乃　寺さろひ　利牛
と　上さられ　まるに　とろく　肥坡

日乃あたる方はあらぬ山行の色　孤岳
只寿羅さに　口きくわ　利牛
近江路乃うしき　問を嘆ぬ　飛坡
天気の相よ　三ヶ月乃照　孤岳
生あらぬ　車に寄込ひしこ漢　利牛
藤乃実落る　風根くさるく　飛坡
帯棗乃　底り連立花くあり　孤岳
二　巴新供　ちろの人のきに咲く　利牛
あるくと　二日灸乃いかひ　出　飛坡
ほろく　あべの　猪あり　ちろり　孤岳
なに神を　ふ門て　つきるも　鶴ひ　利牛
舞明乃　糸も　身につるに　深　飛坡

ほしに　西山武士乃　ふのつしひ　孤岳
尚きけふより　今日大　罪（テリ）　利牛
切堤の　喰倒しさる　様さまと　飛坡
くとり　病室を　仕込　廣庭　孤岳
瘧日を　まさらぬ　せしも　侍ふ　利牛
蔵てきけるる　不諸乃　手ふさき　飛坡
はまあひ　ふ名をいやしけれ　ぬまり　孤岳
とまりの　雲乃　遠き　井のもと　利牛
くまり月　横に　屋まる　古柱　飛坡
すいきり　そけあまる　ちつてい　孤岳
二ウ　ふ門　帯つて　無もるとる　障古す　利牛
ほとゝらくしし　あ風呂の　風根　飛坡

伐透す樅と檜のすれあひて　孤屋
赤い小宮はあたらしき内　利牛
濱まてハ宿の男の荷をかゝへ　野坡
師走比丘尼の諷の寒さよ　孤屋
隣橋の印を年々買うて　利牛
丁満の咄を又富まけり　野坡
廣ゝ野をとら人にひかるゝ船の綱　孤屋
むく起して家の観音　利牛
燃さする新藪を風呂に持て　野坡
十四五両のふりまはしする　孤屋
月花にかきあげ城の跡ばかり　利牛
弦寺荒海雲ゝ積　孤屋

機嫌能かけうふ度之机かゝへ　野坡
小寒出あるゝ北の空　辞年参り　利牛
椽端すり　勝る豆を菓子に出して　孤屋
鑓の錆をけを会　入にて見る　野坡
麦物の蒔絵又溜る鏡に枕　利牛
賣くるも音ゝもを　彩波の鼻　孤屋
物毎も心静に寛ぐてあそびに　野坡
又此隅に　古巣　つゝく　利牛
詠まる此人に上覧二三首　孤屋
久々にけんかく寂しうなり　野坡
茶むらあまりも茶に和世話し　利牛
一つなくに　鷺り　雲陽　孤屋

気にかゝる郭目 [illegible] 北坡
うむし畢る八ツ乃 [illegible] 利牛
丁寧に 仙嘉 俵の口より 孤岳
詠 [illegible] 海て [illegible] 北坡
夕月に駿[illegible]の[illegible] 利牛
色て 寓る 難の [illegible] 孤岳
[illegible] 今年[illegible] 北坡
[illegible] 仕[illegible] 利牛
署 [illegible] 孫 [illegible] 孤岳
幾月 [illegible] 遊坂 北坡
[illegible] 利牛
門 [illegible] 町の 桐[illegible] 孤岳

[illegible] 一 [illegible] 北坡
三人 [illegible] 文 [illegible] 執筆

春之部 發句

立春

[illegible] 伊勢の初役 芭蕉
[illegible] 渭子
[illegible] 杉風
春や [illegible] 丹波乃 [illegible] 去来
刀さし [illegible] 正秀
[illegible] 酒堂
[illegible] 岱山

梅

梅 一本 [illegible] 草乃 [illegible] 沾圃
[illegible] 白の梅木のまき [illegible] 孤谷
[illegible] 秀 [illegible] 初日 [illegible] 利牛
[illegible] 梅 [illegible] 枕坡

[illegible] 一本 [illegible] 草乃 [illegible] 嘉沾
[illegible] 白の梅木のまき [illegible] 曲度
[illegible] 秀 [illegible] 初日 [illegible] 支考

[illegible] 分 土芳
[illegible] 利牛
[illegible] 梅 [illegible] 湯 [illegible] 脇刀
[illegible] 梅 [illegible] 枕坡
[illegible] 杉凡

[illegible] 芸角
[illegible] 枕坡
[illegible] 仙状

[illegible] 一 [illegible] 太来
[illegible] 文草
[illegible] 仙花

[illegible] 利牛

十六日立や臘月の古き愛　凌之丸
猶ち悲初まるら　鳴てゝ[illegible]　[illegible]坡
[illegible]の子[illegible]　くんつかれ[illegible]　其角

鶯

うくひ[illegible]　[illegible]　乱雪
鶯に[illegible]へん　[illegible]の定　其角
うくひ[illegible]に起行　雀[illegible]　桃隣
鶯や　門[illegible]　[illegible]　[illegible]坡
[illegible]の一[illegible]　[illegible]　利牛

柳

[illegible]　柳[illegible]　[illegible]春
[illegible]　[illegible]　[illegible]

又人[illegible]　[illegible]坡
せき[illegible]　尾ハ[illegible]　一凡
町[illegible]　宿[illegible]　柳[illegible]　利牛
傘に　押[illegible]　柳[illegible]　芭蕉

椿

土[illegible]　[illegible]　孤[illegible]
枝[illegible]　[illegible]　[illegible]
会入[illegible]　[illegible]　曲[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　支考
[illegible]　[illegible]　[illegible]坡

花

うへ乃て花見にまゐり侍りしに人々
幕打きらせ文のある小さくの袋さゝ
なりにけるうたのわりけをこのこゝ
罵おきの そういね 花見ゆるか　芭蕉
ゆらしや 内て 花見のとりめぐら　杉風
うりしゆ 来て 花見の当こ来　文草
何ゝ行かうの 蔵宮 花見に侍りて
中小もそまし おきの乃 花見に　素龍
花守や 白きかしらを突ひ付　去来
ねめし行 湯を行 徐や 雀乃花　孤屋
出すこゝ 花見の 青のかたさに　荊口
たりまてもあるこゝ 花見に　斜嶺

柿乃 紫 小枝 小枝
牡丹 きく 人のや 花見にくさかう　湖春
ひとかうゆ 花に 五戒のさかりに　其角
花によも 毛中 なりし 家 桜　嵐雪
山さるゝちるや 小川の 車　智月
老僧も 紫 小枝 大坂 之 乃
詩 母を 花に 珠 粧 ゝる 遅さかれ　祐甫
山 桜 小川 配 おかまて うれ　雪全
罵布ぐしや 花に 気の 浮く 唐書 堂　利牛
ねちつまに 魚や まり 甘や 桜 ゝ　仝
打かへるさかりて ふくや 意所　孤屋
紫まて ひそに 目あくて 花見に　枕坡

食の時いみなかつまるや　山桜　仝

上巳

昔かたに川乃なかれて汝ニ下ル　沾徳
蚤船に乗るやふしの桃の花　桃後
かつら女の神無いつまで秋の雛　其角
鬼のまに隣を居るもこまるなり　ミノ如行
日半時をてらまでまるや桃の花　肥坡
麻の種毎事踏る桃の葉　利牛
菽垣や一るたれくものの花　孤屋
貴柳乃涙よあたられ汝ニ下ル　芭蕉

題知らず

[illegible]　芭蕉

[illegible]　子珊
[illegible]　[illegible]注
[illegible]　猿雖
[illegible]　仙華

旅行にて

[illegible]　肥坡

此集いまだ半ばなる氏孤屋旅立
いつかなる品川までみ送りて

雲に霞にあまて行も如あらぬ　肥坡
毒されらふと月さらり別まらり　利牛
[illegible]　楚常

柳の花蝶のちらしを計る事
花のうて来てくれしから廣に
雨ほちくふもとそれ花のかれ
申しくる花のつよさや深くより
降る来る花のちるさ山鳥
花やさ橋より見てうる花の数
四方より花頃入て　遠のくしく
湖や　ふけしまて　四方の花
かつをんり来て　うんむの安見に
海さり蜜後也の花のかりて
ちらる雨却清聲かつて花見に

可迴　澳川　孤丹　素洗　浮葉　柳川　芭蕉　北枝　楚常　字路　元之

夏部之發句

首夏

埴うをの書かを日と衣久
衣久　十里やくに花さり　里
繰を好く旅寝に甘しく衣　安
雀よりやさ花　次めやとろも久
花乃跡　けさに　よりの歳了に
扇金の服簾　白しおろも久

卯の窓

うれ花や　くらき柳の及とし
卯のまゆ　結るうん関の門

旅行事

岚雪　野坡　九箇　雪芝　子珊　利牛　芭蕉　太来

卯乃花あし芦毛乃馬の夜明ハ　許六
卯のとれに初あらくやうつゝかけ　支考

題あらを

棹乃歌まやうら屋しめぐる船　湖春
髭宮祇池に蓮ゆるあ呂ハ　素堂
うくひすや竹ゆる霧に老を鳴　芭蕉

鄭公

吹まてハ二階にしねとりかゝきす　桃隣
深ゝきを一二乃橋ハ夜明ハ　其角
行燈を月乃夜ゆるせんかゝきに　岚雪
桃灯乃空に冷なし　ほゝなを　杉風
木かくまて茶橋も冷や郭公　芭蕉

まつ雲や雨なるゆゝきに　素堂
淵ゆ啼く風ハ酒に如ハ　利牛
子親顔乃出されぬ　格子ハ　北坡

変

静寺に変種のやしや化とり　荊口
変の穂と共にそよくや筑波山　千川
変跡宮田穂やおとき常ゝき　許六
翁乃旅行を川さなまて送りて
刈おとし変の小ゆのや雨の内　利牛
おすし河かし
変畑や出ぬけても横変の中　北坡
おすし古呂を

浦風やむらかる燈乃とかれきハ　岱水

端午

みりし雨や傘に付たる少々形　大坂 其角

さうふをてみよやさつきの風の色　洒堂

みりまてかきこかぬるあやめかな　桃隠

又もなくはとも有し粽又把　岚雪

こをのやハ首に膏こそ甲なれ　仙花

帷子乃下ぬき寄る袷かね　素龍

夏旅

笠松をみかけて町乃はつきに　卧高

枯は本に昼良はつし足のまゐ　斜嶺

二三宮鶴ハ時とも有しきに　春 魯町

たげ山雲力乃なりぬあつきに　猿蛙

鶴ハ時やはたらきなも茶の白ひ　芭蕉

此月ハ時雨よりの便り

五月雨

きみたんや とのりん寄る丸木橋　素龍

みりし雨乃なのやよと川　大和川　桃隠

きこえれは小鮒をゆきるこの作に　淮坡

みりし雨や千河の菓にもる蒿蔭　岚蘭

このうちハ桃隠より出てきしね

みりし雨や白もまくらもの本　岱水

涼

川雨出根床にとこのみ涼かね　芭蕉

月新よりこく百年の雪の雪より
深しきよ 耀よりまさるる 竹乃枝
行燈を高いてしらしたる 流しかた
清風はすゝれて 涼しき 信の夢
すゝしきを高きに 枝(ヒヂ)の雪 うね
すゝしきや 浮洲丹 よろぎこんよ
夕きゝみのふるきに 雪のかりけり
三ヶ月乃 浮ゝて すゝむ 気うね

題 高らき

橋や 宮家机乃 ありしころ
厨斗むしや 後菜きしき 鳴きし
世乃雨や 年貢 畠乃けしの花

女 の事
灯七
探芝
智月
凡峯
去来
此波
素堂
杉風
正秀
里東

あし女にうんてしうる 菜 飯ハ
岸雪

本堂題にて

山吹も 己も 出る 田植うね
ひる白や 雨浮うさぬ 花のかた
さえ山や 人も すきあれ 生くるき
暁のあさきあさ 雨よ 土手の花
雨乞の 雨ゆ 雨こいうる かりいあれ
堂こし 雨のうみや 秀 葵
一いきれ 蝶もうろ 浮ゝ 蒸ハ
なりかる 蝶うら 落を 来のうね
猪乃牙に もけさる 茄子 うなし
周賣 竹町の 出川き うま

汁六
智月
北鯤
乙州
文艸
仙花
楚舟
残香(ミノ)
岑有(ガ)
怒凡

けうしきハ鶯の栖や雪の暮　祐甫
一枝をすけるき行のうちくれ　仙花
行のみや児の歯くきのうち　嵐雪
さるべき人僕ら酒をしむるをかさく
戒めらるゝひて詠せしむるにいふ
命にしたがひて詠ひてかへりきあるより
なと名にあるかきうせ記出ておりしせれ
けまハ行をうきて
改て酒に名乃伴くめつさうな　利牛
あるへの別望にいさるれ寅日起れて物ひ
手久つるに外のうちなかるゝ出て
行雨をねてわて見るやうなる　桂波

秋之部
名月
行のにわれいつまかくの中に月を詠て此俗の居をえらぶ
名月や見ぬ居ぬ我一下さ　湖春
名しくや　樹九　まつ江に森の廬　去来
家買てこゝし見を初る月我うな　荷兮
名しや浮欲若に　森乃　旭　洒堂
松陰や　竹船　楊に　江乃月見　里東
もち汲の松乃ひくきよけふの月　利牛
家出あつ本立も寄し後の月　其角
ひましの仲秋の月をしめて見侍る
望峯ノ不盡筑波を
明しや　不二見ゆる　うゝ後に町　素説

七夕

笹の葉に祝付てやかしむかへ　其角
星合ふもえ宣ふや　かやの風　孤公
七夕やふりうらる天の川　岚雪

盂蘭盆

とうまひにかけうふ彩や　おれに　洒堂
踊るへきかくるは辞て　宮ハ月　李由
宮ハ月寝ようと門をたたきけり　北波

胡虫

閑閑

胡かれや晋は淀おろに門の垣　芭蕉
胡かれや日傭出て行ふ垣　利合

てしかるのく　郷ハ　湖春

秋虫

年よれは洋もうるを成りしを　智月
悔いふ人のときれやきりしす　丈艸
蝙蝠ゆしくんて落るぬるに　為有
こうろきや著て退やる猪乃上　孤公

鹿

友麻の帰を見うへる山麻ハ　車来
人のもとめよりて
麻乃ふむ跡や現乃那恒所　素誌
旅行のこき
手に跡やすひに立る麻の去　土芳

草花

宮陳此乃 蒔や夏より秋の花　桃濃
花をしきとしらへちらしや 村をしらぬ　此童
屋島乃 蒔や 刈田に 稲の燭　猿雉
芦の此や 白桜揚る 夏ちらし　犬艸
あまりて 淡すて
芦の穂に 心をうつらぬ 客の据　去来
山中に 茸狩を見て
茸狩や 鼻乃 先なる 舟らるゝ　其角

園菊

菓炯 おくなる 香の人 ありし　松風
絆菓も 色に 浮世に 九日 ゝ 花　桃濃

秋植物

桔梗 かゝる 本を 子ともの 寄さしろ　利牛
落雲や 谷に なりて 蟹の甲　祐甫
秋風や 茅の 粉乃 ゆらゆる　木白
葉に 午て 宮に とちかく 蝋の桃　孤屋

とうとしの 夏を 南雲 かゝしまゝへ
うまう 活世 南 くんにて ひさしぶ 此の 雲
未詳 ゆうつき 天の そきそらに 八日なり
なさしへ 人をのゝ かさちを ものゝ 人の
もてあまひて 付さるなる 不しきを 冬さし
かゝぬ 名目に 汝ゝ 此まれ 付の ふつきなれ
天資 自然の 理さらく 恨むかゝ ぼうれ

茸物や英草も児ハ嬉し良　利合
夕良乃汁ハ秋ゝる　荻雨ゝ外　支考
くるゝ秋ハ風とうりてもなりけり　北枝
あき風に燥や　なのふるまき　池の上　俗
庵丁乃行神くし　月の雲　依々
冬之部　其角
初冬
風や　沖よりさむき　山のきれ　其角
市中や　木ハ墨ゆも落ちふ　嵐　桃隣
冬枯乃　破ゝ　ち鶏貝るとさう外　芭蕉
桜木や　狐張まゐ　みゝ　ゝ　支深
鯽の果乃　きれ行冬や　小松原　斜嶺

刈蕎麦の跡の　あらゆむ　岩外　桐実
風乃　薪ゝ　ゝ　小家外　残香
初雪や　猫ハ　毛も　立春　楚舟
風や　勝ゝ　ゝ　猫の面　八桑
南宮山に　詣て
木枯乃　根ゝ　ゝ　付　桃隣
笋貝に　ゝ　猿　渓のさむき外　游力
時雨
芋蛤ハ　腹へ　じけり　初時雨　荊口
黒ゝけり　沖の　時雨乃　行ゝ　丈艸
芭蕉ハ　雨ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
もらぬ　ゝ　ゝ　日ハ　時雨　ゝ　ゝ　斜岩

在明となれば後くしの日成　許六
旅ねのあら
小秋雲氣となりの日ハ挽やこぬ　北坡
大根引といふ事を
鞍壺なし小坊を乗るや大根引　芭蕉
鉾日まれをとまれば雲氣を大根引　北坡
祢　送り荒さる　霄の　去大根　洒堂
さむきをかろふ文字にすべて
人聟の　秋半成送るさむさ成　北坡
あの比ハ先挨拶もさむさ成　示塚
昔夏切に吸物もなきさむさ成　利牛

足のとも高しけて空しき冬の月　秋眉
魚店や遊うち上てゆく月　里東
右の二句ハふる川の屋へをとつれし比
他国よりの状のとしふのさつるを見て
今ゝ夏に出しなり

雪

はつ雪なりとなりて蔵なり　北坡
初ゝ雪なれば見るのゆゑの異なしら　利牛
はつ雪ゆきや塀乃崩れの茅の上　買山
雪なり　日に庵　偈（カサ）ゆゑ　鶴（ミソサイ）　依之
なるは日やうにやうへかるうに柄　猿雖
冬の秋吸ゆちなりして

杉のたつ高稲なり 萩の露 支考
茶の勤や佐野へつたりの宿の稲 小枝
たつ雪や先一ゆかし 消そむる 許六
炭賣の横町さうる 雪の吹かな 湘夕
海山乃 きゝ清ゝる 吹ゝる事 乙州
江乃 魚や曲突にとまる雪の鷺 素秋

題 不知

かすしき雲稲に折し 遠山枯葉に 翠天 呂丸
寒家や 粉糠乃かゝる 臼の猶 芭蕉
禅門の草足袋 おろしに十歳に 許六
川火燒の 雲も足るな 材かしに 智月
白うをの 志ろき白ひや 杉の山に 之道

櫓の雪やあつ 仕文うと乃 天吉八 文中
庚申やとゝに 巨燵のある 座番 残香
詳と 詳る 縁組をんてさと 祚楽 其角
海へ 鶴 霰や 雲に 波のある 仝

きゝすまき

燵すれば 已ゝ 棚つる 大工に 芭蕉
燵掃せうしをもくれば 代に 方平
隙つきや 二段さまる 茅屋 花 肥波
山外乃見るに 出立 師光に 岚雪
待ちや 名にまし るちりにさ 智月

歳暮

志乃くまも又くりえし 同しの 杉風

ちろみきゐ聟入もありしの雪　李由
ありしようとて　鶯一羽としせくれ　智月
端かさ乃けぢくしきよ年乃雪　孤屋
としの秋ハ豆もしらうに倩代　猿蛭
年乃くれこ年ハおそき謎つゝひ　飛波
芭蕉よりの秋有くまのるのを
いくなりしまし其かくりるのに
爪ツメ乞て　公やさしや　年ありり　素郎
行年よ　京人とるゝハ　狀ひとり　湖春

秋諧秋之部

秋の空尾上の杉にとまれり　其角
おくれて　一羽海にとる　鶯　孤屋
行旁に　日傭　掛へる　見候て　仝
月の隠るゝ　四扉乃　門　其角
祖父ゟ手の　公桶も落ぬ斗也　仝
はさひ迄ハ　丸太とろうに　孤屋
下京ハ　宮治乃　糞船さしつれて　仝
坊うゑ　寒るる　簑ハ　あしき　其角
足袋乃　子ありして　居る心かり　孤屋
息吹ゝ人に　霽ゝ乱の　針　其角
田の畔有　早苗　把て　投て去　孤屋
乃者乃　ときに　偏に立の　常　其角

行燈の引出しさうほとゝ淵　孤屋
影よ　あいたてうたね乃　月　其角
冷魂に鮭のさかまはひらくこと　孤屋
馬乃　下こゝる　筏　なりけり　其角
夢之の　梅ほ　桂乃花のうち　孤屋
むしのこのあり　あのこせて　雲　其角
いきむ　跡なきまき　金乃　ぼりひ　仝
宮の宿乃　ひらう　しき　内　孤屋
夜　草　ぶしよさまして　雲　其角
ひぐことい人ハ　小僧　いやうれ　孤屋
年は夏　密　棋乃　かゝも　落ちて　其角
常とまさなりら　名風　星　孤屋

君まねハ　あれまき　淵　其角
稗と　はしの　行　つゝ　孤屋
卒　ゆへ　蕎乃　あまる　秋のくま　其角
小より　冷る　月　乃　雲　孤屋
紙燭して　弱ねて　来ちり　酒の　其角
上　塗　なし　に　洗く　おく　雲　孤屋
小　西　濟む　行　言　せて　其角
けゆも　ゆゝ　浮　茶乃　ね　孤屋
孤屋旅立す　出来て　酒へのわりける　酒へに
今四句表演すして　吟　後ゝ　無

天野氏奥行

ゐなとより拾ひいつめて寒山まに
とんとく名は落る　村風
入月に花はかんのりと寺明て
堀乃外まで　桐乃　こゝろかる
洞壺よりなまぬるくんてつゝめ
泊よに降さる　雨乃　つゝ　やむ
ウ　爪の花とまろふなんかゝ葉かる
近くに居まと共谷をまこゝぬ
年よりこ者を此行ねまかし
いつよりきむい　十月の時ふ
壺所けゝは奇羅を花立て
かなはなりく　嫁乃　姑合

桃隣
牡坡
利牛
桃隣
牡坡
利牛
桃隣
牡坡
利牛
桃隣
牡坡
利牛

よんなりと細工を深るゐらんも
鎗持とり　もとる　夕　月
時なふに念佛きとゆる蟲の内
鴨まつ黒をまきて　いつそんなり
人乃物拜ねて　楽を花ぬ宮
もとや　泊まも　十六　月　さら
ヲ　より平の機に火桶はとり直て
むりひ出ことゝ　ぞれも　石臼に
買込さ　笠て　男粹　さくまく
帰るけしき　魚　さは　清く
此度の薬はまくし　行ひ家
壺の木来に　月　かくし

桃郎
牡坡
利牛
桃隣
牡坡
利牛
桃隣
牡坡
利牛
桃隣
牡坡
利牛

同し老乃咄しあかくて　桃隣
ねまきなからて又新蕎麦を待　野坡
よれやうに香盤上立て置る　利牛
是やうしんされいあかぬ高ヒ　桃隣
隣みも肩にかゝらぬ墨を書て　野坡
京へは無別家なし念入　利牛
焼物に組合たる富田鮎　桃隣
隠居を望んで今日もねて啼る　利牛
髪置は雲助らする思案也　野坡
先沖までも見ゆる入舟　桃隣
内でよりつ菜もなぐても花の陰　利牛
ちるとも風のやみ関き　野坡

名

神無月廿日ふか川にて即興

振賣の鴈あはれなり恵比須講　芭蕉
降てはやすミ時雨する軒　野坡
番匠か樫の小節を引かねて　孤屋
片はげ山に月を見るかな　利牛
好物乃餅を絶さぬあきの風　野坡
割木の安き国乃露霜　芭蕉
網乃者近付舟に声かけて　利牛
星さへ見えず二十八日　孤屋
ひだるきは殊軍の大事也　芭蕉
淡気乃雪に雑談もせぬ　野坡
明しらむ籠挑灯を吹消して　孤屋

ウ

肩癖にたる湯屋の膏肓に　利牛
上ぎきの千葉刈藝もうへの穴　北坡
ゐるに出息　月に　閉て　寒する　芭蕉
御堂の七ちまうりを　育つれて　利牛
塀に　門ある　丈　十石　石　孤屋
此時代に　隙鬼も　是　橋月花　芭蕉
秋に暖の　うける　青草　北坡
新鼠乃　蓋も　おちつく　雪の上　孤屋
吹こゝ　是たる　笠とりに　行　利牛
川越乃帯しの　あを　河　雪うり　北坡
平地の寺の　うすき　岐　頃　芭蕉
千物を　日向乃　方へいさゝ　せて　利牛

[illegible]　鴨乃　苞　かくなり　孤屋
笠　月に　淀　世を　言る　京住居　芭蕉
文　沙汰　すしに　むすも　春　北坡
ときくさと　大藤　月も　四つの　かね　孤屋
[illegible]　ちの　む　状の　ぬ　先　利牛
中よりて　侍の　軍合の　侍りの　ゝ　北坡
[illegible]　秋せぬ　夕　月　芭蕉
ウ　風やこて　秋の　時乃　尾さうり　利牛
鯉の　[illegible]の　縄を　[illegible]　孤屋
ちゝはらこ　米の　楊埼の　行　廣　芭蕉
同　[illegible]の　つまの　ねちこやく　北坡
ときもうも　花乃　三月　中時に　孤屋

梅景のちりをよそらへ まつ風　利牛

雲乃雲 おまはみれハ尚雲し　杉風

目乃出るまへ乃 赤き冬の雲　孤屋

下 此を一本演 奇明て　芭蕉

あつさときるく 大名乃 佐　子珊

身をあるる風も 雲く落り秋　桃隣

雲をゆらまて ひろき 留地　利牛

ウ 鯉 谷乃 悦きれる 稀れ乃　岱水

第ちしらへて 鮮第 雲る　世坡

二三 冬 寝所 ゆふ門の根　子珊

る乃 荷物の さける 干 ゆ乃　沾圃

行ゆ後 ゆ 鯉に 行へる 夏の朱て　石菓

稲 子乃 さ 雨のよそく　杉風

ゆ者乃 一人も見ね 浦の秋　世坡

めつさに 風の よゆる 金 色　利合

青くの月をうちて 旅大工　俊く

資中へのやる 回をうへ ゆる　桃隣

菓 山しろのまつ 上にぬちりて　子珊

名 川 ゆ まくに 小鮎 ひとする　石菓

杉 雲 ゆ まれて 気味よき 鮮 の 変　杉風

資中へ まつ 山へ 行みち　岱水

物思ひ とく 菩く と 親 かく 望　孤屋

を 集めて ハ おやき 精 近日　芳良

隣景を 橋て 俵へ たゝり 込
つきくつせて 茶代の櫻
あるゆて なく ひと月 暮ぬ 花也
とまりへ 行て 火をとりて 来る
又けさも 佛の会て 得を明
枝をうくして 賢と かかなり
大坂 人に すれる 冬 行月
酒を とまれと 祖母の気を入
をけ ぬる 川茶の 酒のとけ あり
次乃 小 泊屋て ぼに むせる 聖
絹来に うみて 居まと 好 客れ
ちゆ乃 うれに かゝる 花 ほ来る

桃隣
依々
沾圃
子冊
利牛
杉風
利合
世坡
子冊
利牛
曽宮
杉風

花乃雨 泊ゝそに 内に 浮 町て
男まりに 蓬 をろ ゆ 花

春水満四澤の気を成

川柳 水もうこう 柴 葉に
青柳の 時次 年 まへ 来り 浪つ ひ
川越して 常と 花に ある 柳 うま
浜亀に 人だ うり まる 柳 うま
青柳 とさ もに 動くや を 河え
弓 葉の 下 ろ 宝 行 柳 うま
青柳に 吹出 されり 万の 胡蘆
いてのあ る 風に とゝ すや いれ ほしら
草 せんや 追 る 物の むさ うさま

桃隣
岱水
山店
嵐竹
岱水
可長
史邦
里倫
去来
白良
史邦

芳野

花さくやり山は日ごろ此都わすれけ　芭蕉
梢のしたを舎ごとせしけり花見せて　山店
花やしらちらしすや　物のあはれの山　去来
ちらしなや　末のまつまで通る花さかり　洞木
三京清水花見ありし七ヶ条　芭蕉
藪の麓の衛門樓の花見うかな　山店

三月盡

赤猫のうるさくなりぬ春の暮　山店
針中ぬいは春小積がりて　ものくさ顔　史邦
水風呂の蓋ぬきしまのくれ　嵐竹

阿羅野

尾陽蓬莱に彊未堂主人かねがね句集を編まんと名を
ぬらしぬれしのち何なんとあれ名あるこのをあらしに所なるかに
花ぬれやうるおいしらせ出郷の旅寐せしわちもくの書捨
あつまりて多くは目ぬけ行くまてまつ日まさ
世のあやうきけぬや京のあやうきやうの空のけしき　柳さんらの
鎗の平日てふ鳥の世のうさあしなる風情ふかきていきつ
実を拾ふあるのものもいのれいはやいとのいとのあるあ
心ぬきしけあるうなきうにうてあいうなかは
仕方に無言者乃大空をとられて千里のきはまりなし
乃ぬきしうちまつ人せんけ世乃系は歸せるとなりぬとし

元祿二年　孫生

芭蕉　桃青

花三十句

負宝
路通
信徳
晨風
友五
尚白
去来
野水
亀洞
越人

山ハ何ひ出ス花を夕日に見出しより　心苗
おりしろや　煙屋ハなしに花の雲　城人
ありあひや　ナあ花よりの物ゝまれ　野水
猶来て友選ひたりよ花の山　冬松
花ちゆゑおけふ昔ゐる尾上ハ　冬文
首出して　岳乃花見る　飽とり　荷兮
酒たゝゐる人の徒ゝ
月　花もなくて　酒の山ひとりハ　芭蕉
行る人の山家にいたりて
橿　乃木の　ともねにまゝ夜寒ハ　仝
杜宇　二十句
かくしきゝ成間をくものに求めて夜ゆる何ゝ

ゆる流の高あ月ゆうらん　何ゆ　季吟
月ゆ人音楽　山かくしきに初ゆ　素堂
いそうしき中に　咲けり　かくしきす　鳴雪
燭燭乃ひかりあくしやかくしきに　我人
おひしまの　はまねするや　時ゆ　松下
跡や先　氣の　ゆくゆ　道の　何ゆ　重久
かくしきに　ともうしき　雪ゆ　柳風
あるへのまゝ　夜夜勿せよと　ゆけれハ
かくしきにたゝりもなき　鶯ゆ　嵐淡
晴ちきる　空なきにやかくしきに　芳梧
蚊屋　奥き　極覺　うりや　何ゆ　一髪
三ゆかゆと　跡乃　かくしやかくしきす　仝

淀あく

ほとゝぎ栄ぬ十月もとゝぬき花ぬ　風泉
晴しきや深入らぬ先のわらくきに　杏雨
あふなしや　今見て嘆く　時雨　今下
くらぬしや力うましきほとゝぎす　仝
つと馬よまう合けりわらくおのに　鈍可

たゞ明乃月を待れるゝ時しられ木
うさぬきにあくきく人かな　ほとゝぎす　大津　智月
うつりとうつゝ雲あり　晴雨　季桃
うつうつと春乃ゆそ　ほとゝぎす　市山

月　三十句

ぬりしと無せう人行月　荻ぬ　梅舌

我れしも月ゆる中の　物かな　湍水
月ひとつとひとうちの今霄ぬ　一雪
雨の月とこゝもなしの　落ぬり　故人
けうときに　お招ぬく　月　荻ぬ　昌碧
風ひとうの霄ハさ礼き月のく　紀　津　市柳
れしけにかゝて　いゝる　月　荻かな　一髪
とのまでも見とせ月の　花ぬ　長虹
味まで　烟袍て　月　見かね　任他
一ッ風や　いかはの見るけふの月　亀河
名月ハ荻明るきともなりけり　故人
名月やとしよ　十二ハありなりぬ　文鱗
名月やかはつきたて　淀ぬく　船　昌碧

名にしやせしてあらく葉の中　今下
名月や鞍乃青と犬の出来　二水
見るものとおかべて人の月見れ　北方

名月の心いそまゝ

むつかしと月を見る月は火も焼也　荷兮
いつの月も跡をつゝまれて寄し　仝
名月や海もおもはせ山も見手　太来
名月やゆゑとゆゑとおもはまき　胡及
名月はあるまきもとゝぬ林かな　洵雪
宵に見し椅にさひしや月の新　一髪
十三夜　新ふさ萩ゑ見ぬ程見る月萩れ　杜風
朔日　暮ゆゑに月の乱もなし海の果　荷兮

二日　目なる人も海なきさ　月の夕れ　仝
三日　何ものの見えてゐも似ると三日の月　芭蕉
四日　夕月萩ひんとんけしてあらしゝ山　卜枝
五日　何月とも見きゝめりゝや宵の月　イヨ 一泉
六日　浪川見雪ふとろや　月の姿ら　文章 雀声
七日　能ゆゑにまゝして帰る月萩れ　一髪

雪二十句

大洋にて

雪乃日や船頭のく　都乃立　其角
いさゆゑ山雪見ゆゑに所まで　芭蕉
竹の雪ゆゑて萩なく雀ゆゑ　塵交
かさかるや雪ゆゑ山只の山　京 加生

車尾雪なきみゝ此ぬしくこゝろ　小春
ちつ雪ハ見てうゝ顔を洗ひけり　故人
ちつ雪に戸明ぬ尚も雲庵ハ　見幸
ものうけのふゝぬも雪の訪人ハ　松芳
くゝき秋に物語見てり雪の限　二水
雪降て一つ屋にまゐる雀ハ　鬼仙
秋の雪ねとさぬ世に枝ねらん　除風
ゆきの日や川筋ちり わそくと　晴汀
初雪や杉に小きるまの雪の暮と　今下
雪の江乃大船よりハ小ゆゝれ　芳川
雪ハ新うゝ鮭まゝる松をちし　冬文
雪乃暮稲きやけしや鷺の声　桂夕

かゝしくや洗雪かゝる酒浴服　荷芋
ちつ雪や先草屋にて満ぎて　路通
けふ来し雪ハ見所ハつゝ雲　松の
船うけていくゝふれとも海の雪　芳川

歳旦

二月にもぬりハ世しなの花の夫　芭蕉
あれ人雲ハかゝもかゝし花の去　古梵
けゝあや元千年ハつゝく縄　風洽
雲うさり伊勢ハ家賀人ハ詩　其角
うゝつ吾連歌にハいふほれし肴　文鱗
月雪雲ハあやにも志しし門の松　太来
かさり来にならて年ゝる福代　一晶

元朝や何とかすれと重きれる　路通
元日ハ明きるかすまゝに　一笑
歯固もし梅の花ゆ自ひに　如行
あらう社老ゆへとふぬとし其妻　蓬格
[illegible]をうちうけて見やゝ雪ゆ梅　雍門
伊勢浦や此ゆ[illegible]の妻　同
[illegible]の名をつけて見ゆ宿の梅　昌碧
太平の妻ちいさうしる　竹[illegible]　元廣
小栱子栗やひろとむまつのうを　舟泉
[illegible]男手持楽をゐるひけり　仝
山柴ようしく回まる　竈ゆ[illegible]　重五
松[illegible]　釣雪

月花乃初そ翠屋の[illegible]かな　仝
連て来てゐふまゝ[illegible]せけり　万歳楽　一井
[illegible]白[illegible]ちる祢の[illegible]　胡及
見[illegible]　長虹
そ[illegible]と起て縄[illegible]　嵐弾
さ[illegible]姫やふ[illegible]の面[illegible]　仝
遊[illegible]菜や舟の道のかんなくを　湍水
佛より祢[illegible]　[illegible]
の[illegible]宮や[illegible]　朴什
かさり[illegible]　冬文
正月の奥のかしら[illegible]炭[illegible]　今下
[illegible]の春寂しかゝる　閑ゆ　冬松

[illegible]

柳風
防川
犬山 昌勝
夕良
梅舌
[illegible]
仝
[illegible]人
仝
荷芋
仝
仝

[illegible]

俳 般齋
貞室

[illegible]

[illegible]人
[illegible]
俊似
カヾ 小春
[illegible]維
岐阜 [illegible]秋
元寮
[illegible]
[illegible]人

蔵不しれのさらにわらん雪のあた　蕉梧
梅わて　あたり　見きすれは聖代　一髪
暮もなきむかんのすいいを　冬松
みのむしと　あまつる　梅のさうりに　蕉笠

個代民の息に遊て

毒の木に　なをやさう　雨や　梅のあた　芭蕉
学乃なきそこ　なる　ひしに　若風
学の　明や　附ひろに　尾　ゆも　去来
あけ　かゝや　学ときまるとね　約瓶　イガ　相
うくひすにちいさた　蔵も　捨ふ　はこ　笑
学の　聖に　脱さる　陀仲　に　日　市柳
こくひすになしこもなにや　わかる　日　夢々

学に　多波　あがれあしさ　に　梅舌
さとうすむ　多を　まつの　聖に　聖多
紛くて　なしの　かゝや　夜　雲　かれ　塵交
紛人の　蓑を　とまれ　燃　蔵　かれ　冬文
かまかえや　まさうけろふの　一二寸　芭蕉
うけろふや　一るの　眼乃　とろくと　今下
多仙の　見る　君を　まるに　ほさうけろ　路通
蟻を　待るけしきや　ものゝ　枝　荷兮
蜀中録　きしま
つきあかと　児の　ねき　見るさ　夜　舟泉

接木

洋の　のしさうくし　ゆねさる　継穂に　今下

椿
仝
春雨
仝

曉の鶴籠にかゝるつゝみかな　荷分
蔵深く雄気の深さ　桂々女　卜枝
ある雨はいせ乃屋へとまりけり　湯水
妻の夜身ともせ　ほとゝ　嵐深

白尾鷹

ちやきの屋深さまけさる白尾ハ　北方
蝶の井に妻雨かゝる　ちかりれ　奇生
立閑に芸草見さる明屋ハ　十戈　亀助
さゝしと親子揃けり深しし　舟泉
すゝしとつむや深あるや古筆　其角
まゝしと案山子の出けり古筆　芭蕉
土橋やよきくさる深しし　淦車

川ふゆや手紙のへてつむつゝし　冬文
深しし頭巾にあまるひとりよう　青江

螢亭氏美池に穢を覺せられ八堂とあるなし

池に鵜なし候名也寄に　柳陰　素堂
風の吹方せうしろの柳の角　北方
何るもなしとるしけやあまれ　故人
さし柳さく市なりたりしし　一笑
アヘさうりちやあはゝぬる柳ハ　小春
すれしやあまれ風にとりつゝむ　一笑
とりて付て代を見むる柳ハ　昌碧
さされとも髪のゆるまぬ柳ハ　杏雨
うしうくて塩にのうてやあまれ　此橋

吹風に牛のつきむくやなぎかな　杏雨

吹風にゆるゝ中にも柳かな　松芳

風なきは見へてなりけり柳かな　校遊

美しき野路をまくね柳かな　椅兮

鶺鴒もしばらく月の柳かな　仝

青柳にかくされて通る車かな　素秋

引のきに後へかへるやなぎかな　鳴歩

菜の名へつまされても柳かな　生林

仲春

麦の葉に菜の花かゝる嵐かな　不臨

菜の花や桃葉のちるのあらしかな　長虹

なの花の中にかゝる月夜かな　今下

菜乃花や畑うちのこしたる家　清泪

うつくしもきえて畑から桃の花　去来

万歳を仕舞ふてかへる菜畑かな　昌碧

つゝまれて散るはちらさくらかな　誠人

鶯や其日一声梅の花　笑中

鶯へ葦にさゝげ咲かゝり　除風

風ふくと枝へかゝる、桜かな　一橋

うろより見ゆる山々の桜かな　冬松

さくらさく山や人の来るまゝに　一髪

木の下やちらちらと雪井かな　廿水

あたの桜は橋で見し世の桜かな　除凡

雪をまつ日をあつめし桜かな　一雪

行かるを淪縄解てゆる縁まの代
ませ浮いて奈ゆかるる 性うあ
鳴るまでいつまあひ鳴のねうもの代
あつつきをむかうしさうに鳴 蛙
いくすへり骨折る嵩のうつの代
飛ばんてしりしあひくかりつうな
不圓を飛て後に居るをる 性代
ゆふやこ乃麿細にいるかとうの代
ちの蝶を見の見出に笑ひ代
梭桐の葉にまとまして通る於蝶代
かやまとの中分出うねる さてこの代
かまとせるや若葉とうねて行於蝶

後車 山ザキ
宗臨
落梧
故人
去来
落梧
杢下
一井
柳凡
梅餅
炊玉
百歳

暮春

何のこれも浮かねにちまの堂を
稱ふとしてるのハ素ふね堂中
かうろく乃おとる 此ハ堂の所
堂をとり 月ゆふさに 同の堂代
草刈て堂選出に 童 この事
行蝶の とまり 踏さねてのきこに代
愛畑宮 人見るまとの 塘を
すけやあや 徹の 月乃すこ所
おろしと山吹ちるを 龍 の書
雲間に山吹うすし 歌乃色
山吹と蝶乃よきれねあしに代

忠知
荷分
世多
舟泉
酔歩
焔遊
大阪 杜国
式之
芭蕉
世多
卜枝

一 [illegible]山嶽のそくゆかんかな
[illegible]山嶽のそくいはねば
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
友減て何まるろいるや 夜の雪
角落て やまくも目ゆる心鹿が
なら漬に親よの浦の汐干が
[illegible]
人[illegible]舟と[illegible]の汐干[illegible]

波草 襟雪
仝 蓬雨
去来
俊似
長之
長虹
嵐潭
且菜
蔭笠
[illegible]人
今下
三ワ 友重

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

初夏

[illegible]
更[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

荷兮
兼正
[illegible]
卜枝
[illegible]
仝

路通
今下
嵐潭

とてやるの船越人かのちまるせ忘れ
うさく明るつゝもの比又縁よやつ込れる
髪ぐり燒 麦もいつる人し言史
山路すて
なかめ来ても見つ葉の 一ツかな
ぬちまつらハ松ことなるなん 桂の
柳の木のいとりとさらに若葉に
切りふのつる葉を見れハ 櫛に
若葉かふきくふなるのみ木に
つけもなくそのおくのつる葉に
ひぐくとつちつ葉にまする如蝶に
ゆゆひしく若葉見出れゆゆ人に

荷分
芭蕉
一井
找人
不交 ギフ
全 嚴羅
龜洞
竹洞
鈍可

おけ山や下ゆく水ハ沢和木
上ケおりのつの種とて麦一穂
枯色ハ麦まつり見る夏ゆゆに
麦かなて麦の木まつり 鈍りけり
むきかふに志りるく里乃 葵かな
志ら茨のふまつなや 蝶乃 嵐色
鳥飛てあふなるけしの一重に
けし散く 麦に 雪を見る夕に
大 粧を雨ことこそし 茨子の花
茨こひり 児も 拾ひぬ茨子の花
徐川乃 唐みて
菴の房も見しかくなりぬすとして

麦久
玄寮
生林
作不知
鈍可
嵐榮
落梧
李桃 ギフ
東巡
吉次
嵐雪

さひしさ乃多ハ松ゆえ花かつこ香

野水

仲夏

霞ハ雪ハ笠にこゝろく覚るなり
刈草ハ一ツ面に心をゆるかさる小
窓くらむ夜陰ゆせのかゝるかさる小
園きよりくらきく人呼覚るなり
乃細く道ハ泥なかさるかさる小
あゝ乃花ハひとりけるかさる小
草かりの神よりのつるかさる小
あ夜て清ける神なる かさる小

桜井 元浦

一髪

不交

風笛

青紅

倉咕

卜枝

鴉歩

秋芳

ちしまて薬室をとふらハれたる比
あらはりとの井とくいやめの都

枝のむれて梅の一本の黒ありけり
かやり火に麻にせあくなりにかり
雨のくれ傘ハくすりに鳴枝ハ
枝の瘦て燈の上まこりありけり
藤の花をうけける蓮の鬘ハ
汝引て藤の花あるむ異りな
豆伸くて姫百合美わらはるなり
竹雲あまり鴨さけてきりけり
笋ハ時より志らしゝ弓の竹
咬おまハさくもなきあ寂ハ
あしゝ雨ハ柳きりまる 汀りな
古の比ハ小猫になりぬあしゝ雨

小春

李雨

二水

一笑

胡及

児竹

此橋

長虹

去来

大津 也舟

一就

尚白

あしく雨ハ今にまなきき雨ゆゑハ　亀泗
岐阜にて
おもしろうさらしさそふる鵜縄ハ　貞室
同しおもて
おもしろうてやかてかなしき鵜舟ハ　芭蕉
おもしく
鵜乃つらに篝こゝれて憎なり　荷兮
おもしく
岸ゆゑハ鮎も嘴ふん鵜岡舟　越人
先ふね宮相もかまへぬ鵜舟ハ　大津 淳兒
曲江に篝乃見せぬうふねかな　梅餅
鴨宮出ハ見えたりゆるゆくなり　路通

松の立乃緑を　見さる夏ゆゑハ　卜枝
江の根をかくれ　和平の樗ハ　鈍可
蘭の花や　源よりくらく　霄の面　仝
梅子や　蒔絵出人をうらむふん　越人
冷しさや　灯のこる夏のなき　岐薙
夏の初や　元祖火ハ廣見ゆる里　旦藁
唐ハ留さに
すゞめさ人　さらなに夏の炭俵　其角
夕かれや　稲ゆゑかくの鹹かな　芭蕉
夕かれ乃　あれ人のあらぬ也　北水
夕風ハ　蛙乃　鳴ゆゑのふとさハ　偕雪
山路きて　夕かれ見さるのなるゆ　ツヤ 市柳

名ハ風ちま夕うれ似て着れ　長虹

暮夏

楠もうこくやうなり　蟬のこえ　昌碧

夕立に干今ぬるく　頂練ハ　今下

さくしさに　桜もやふぬ　木陰ハ　玄上　法印

涼しさよ白雨なるゝ　入日陰　去来

簾して　涼しや　宿のまり　口　荷分

雲の嶺ごしうけ　雨さくむなり　地水

すき庭乃　朔あつかふぬ　墨ハ　荷分

松もいはれ人に　蟹ハ　久すこ　如風

飛石乃　石鉢や　草乃ゆきこ　俊似

涼しさや　櫻の木ゆく　名のまる　仝

桃灯ハ　とあやう　ゆしく　涼し　舟　卜枝

まくしさ　ハ　いまこれてもまる　川　未堂

ゆちつて　名ハ　まり　草　かゝ　岐阜　秀正

蓮みれ　日に　さうやきハ　ゆくまる　松坂　晨風

笠を　着て　風なり　草に　笠ハ　古梵

ハ骨ハ　名ハ　ゆれ　ゆるまハ　芙水

すゞくに　清名に　松ハ　古　長虹

さしきりて　泊て　ハ　沖乃　清水ハ　俊似

連ハ　待せて　ひまる　清水ハ　文瀾

引立て　ちにのまする　清名ハ　潦月

かくひら　ハ　浅黄　黒ハ　清水ハ　尚白

まて　雪を　ぬるに　清ハ　ゆるに　一髪

[illegible]　ト枝
麻の[illegible]　李晨
[illegible]　越人
[illegible]　素堂

初秋

[illegible]　越人
[illegible]　圓解

[illegible]　仙花
[illegible]　方生
[illegible]　杏雨
[illegible]　芭蕉

[illegible]　文鱗
[illegible]　荷兮

[illegible]　仝
[illegible]　跨歩
[illegible]　胡及
[illegible]　嵐彈
[illegible]　去来
[illegible]　昌長
[illegible]　警汀
[illegible]　一髪
[illegible]　素狄

芭蕉
其角
舟泉
芭蕉
伏見作者不知
任口
荷兮
胡及
素堂
俊似

芭蕉
小春
益音
今下
卜枝
一髪
泉
重五
其角
東順
林谷
越水

宗和

北枝

越人

防川

舟笑

胡及

暁髄

其角

芭蕉

一笑

暮秋

巴丈

昌碧

越人

暁髄

其角

仝

二水

イヨ　十閑
ミノ　芦
加生
路通
湖春
尚白
湍水
荷兮

落梧
飲玉
仆下
荷分
一髪
仝
李晨
野水
昌碧
仝
一井

縫ものをたゝてゐる宮雄が　落梧
石臼乃　破まてかしやつとの花　胡及
青くともしくさへ　みゝの見　杨が　文鱗
ひらびしき汐籠にかゝる　蒸りな　卜枝
手ゝ枯く風乃　佐ともなき　明雪
其池乃　うゝちに見ゆる　枯葉が　一髪
鶯居へて石けつまつく　枯せが　松芳
木かぶしに　ゆゝしけり　鶯の巾　杏雨
鶯鳥乃　略にひきあるなり　蕉笠

寒月

梅成出て　夜し月を　地もしろし　世水
何さ淡乃　大根あらに　月雨が　俊似

仲冬

おろしおく　淡雪のうなる　霰が　勝吉
あらしにつまてかゝる　霰かな　全　重治
格よりする　番茶をまゝる　霰が　林斧
紫の宮をわしらに　やひあられが　李雨
ひてける　葉をかろせにあられが　宗之
霰乃　物せんとんの　実のあられかう　杜国
あ柳　宮紫の　紫の　見さる　氷が　勝吉
池き池　氷の　ときに　明きけり　俊似
淡きつるて　まつ　葉かきかり　淡氷　除風
折おりて　何をに　志らに　あ程が　夜舟

兼題雪舟

味より雪舟ニ和さるれ　塩車
ぬるくなると雪舟に乗るにくさ　荷分
茨をあめて雪舟に乗るよあれ　長虹
ちる風より雪舟に乗るなれ　一井
雪舟にや情ひも　恋に立てゐる　鹿門
つけ入て知るに雪舟のとも　含呫
貴海や羽白鳥鴨　わりかしら　岑忠知
舟かさく火に如きたる衛門なる　鹿門
鶴鮮を見てもわたらん　友ある　村俊
井をわるものハ六月雪とく来りく
男にあらず保ずり
汗かしてハ谷に　寒江正氷宮代　冬松

海嵐揚の壺埋々花氷宮代　利重
炭窟の完きくやら落けあり　亀洞
鑄帯成沙めと出るさむさ代　塩車
火とかして幾日よりぬ多樣　カ一笑
けつてけし底起せハ多ほ作き　亀門
多ほ殺りまさよりそらん　はさらら　芭蕉

歳暮

深つきや　閑ともれぐ酒ふれ　李下
吾ちてよりぬ　物ぐり年代等　尚白
りち花の後ハとけてちりぬへし　肥水
ある近く樽つゝかゆる　菜畑代　亀洞
焼ちらひ　梅にさけたる　飄かれ　一髪

本当に月見て来る人のこゝやけにとて
柿の実ひとつおくらる年乃くれせ
うしなはれさうにやせんとて
年乃くれ柿の実ひとつくれ　荷分
門松をうつて　恰一荷ひ　内芳
田作に嵐近ふ　夜乃寒さに　亀洞

供屠蘇白散
雑　年中行事十二月内
いとけなやとてなめそむる人次第　荷分
まゝ日本に　としおとに鳥居の夜乃つかれ
石清水　陳内本に　皆あるも　去づかにかさしさくらに
灌仏　氣ふの日や　つゆてに法ふ　佛道

諸年　おもも痩て　葉付なる　髪落し
龍朱　うちいけてかゝるに　笑を雪臭き
乞巧賛　ひつ葉より　七夕草を　ゆかへ　よき
弱達　氣髪も　旅乃きるや　あゆむかへ
稲虫　草は葉や　足乃　智さるきかしに
十月　夜衣　到しきの　衣ふ人よき　かゝるう　花
[illegible]　乗服に　幾たひ　持をわかる
近衛　おくれてや　服ふ　ちうるゝ　思ふ面

詩題十六句　野水
今日東和洋牛會春風来一時来
氷あし　流水まるなる　春の風
白洋落梅浮洞水

なき香にもしらで侍る梅の匂ひ
春殊ニ伴 閑遊ぶ
花ぞ雲にも 留守とのみこそ 語らはれ
桃花下亭俳閑晏雲
雲入るや めぐりきせよ 花の下
留春春不留春帰人寂寞
行春も おくるゝ人の 思ひ哉 紅
厳風吹袂衣冠寒漫歎
緑従い 松の間 風に行 おもひ
池晩蓮芳謝
其の香も 行水さそふ 風かな
暑月貧家何所有客来唯贈北窓風

涼しさとて 切れきれにけり 北の窓
大底四時心惣苦就中断腸是秋天
雲井飛 雁をさへ下すや なし 行秋を
春朝風雨遂秋気漸壮粉
秋の雨 さそへ 風よふ 人もなし
遅遅鐘漏初長夜耿耿星河欲曙天
親とたのむ ひとりかくて 秋ともなき
残影燈前墻斜光月穿扉
独り寝や 泣てめる 身より空の月
万物秋霜能壊色
白菊や また花にて見えない秋の色
十月江南天気好可憐冬景似春花

あらしもあらし良しく小さく
寂寞深村夜残庶雪中閑
詩あらき出も来れむらや書かう
白頭歌詩俳名経
俳名乃れ不 優懐く白髪小
禅閑乃拼ひのこゝあひしも
さらに知らしくて

舟家

鋸鋸 目立
付木突
釣瓶 縄打
糊賣
馬糞掻

かけろふ乃ゆゑ目にいたつかり
五月闇 多窮てゐし人の家
かへらきや 酒はこゝ所なる 彼の里
いさ 秀のきかうわけむかくもかゝ
あらしの松乃 まゝきにつれ立て

本子交人 魂荘行狩香煙引到焚處

越人

かけろふの抱つけもつかもふ
揚雲舵 雲鬢半偏新睡覚 花冠不整下堂来
さる風に 帯ゆるゝ 心ゆる 雪ゆ
昭陽人 小頭鞋履紫衣裳 青黛蛾眉々細毛
外人不具々 庶矣
もの数寄やむりしけまたり 侶なかん
西施 宮中捨て嫁眉谷 不献吾王是愛君
花なるゝ 植ゑ人らるく 牡丹なる
王昭君 お顔風沙勝畫図
よの本ゆもまきたれ 各々乃 御代
一日留守をまるゆ待りて

鈞雪

丙辰 己午 未申

[illegible]や の数や 以備供燒火雲で行
桂[illegible] 生ん絵出乃 来る 日[illegible]な
[illegible]の 眠つまに 清りに 扇りな
[illegible]ひよ 盛于上を 踏に とも
蟬乃書に 武家乃 文食るに行り
[illegible]や 鶴[illegible] [illegible]ね 作り
[illegible]て生[illegible]に[illegible]に

山獣 野守 里虫 海奥 川魚

[illegible] 上[illegible] 生れ[illegible]
[illegible]の[illegible] 日[illegible]
枝[illegible] 蜀 [illegible]な
[illegible] 月
秋の[illegible]の[illegible]

樹水 児竹 含咕 仝 仝

牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾

是謂人

一方ハ梅咲 桃の 継 [illegible] 越人

藏舟於壑藏山於澤謂之国然而
夜半有ゝ力者負之而走
[illegible]
[illegible]
七夕よ [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

鋭者天 純者壽 藤房 師直

桂夕 市山 一井 長虹

一体　いろくにかかるちおりしや月の雲　湍水
清然　鳴鐸に浮くろひもなきうつゝ代　嵐蘭
山岩　わくふ山ハ霞に減るり　雲の角　湍水
海石　苔くりし踏まハ古もなりけり　仝

名所

八重ゟ千ゝ奥まで見てる龍田代　杜国
志ゟ奥宮寄や　式部ゟ大江山　荷兮
かゝ捲乃松ハ花より　梳あて　芭蕉
紫一把ゟつまて花見るなり陵まで　湍水
横塚まてハ見るのあゆゑ花盛　荷兮

琵琶　檜眺里

雪ゟ待る鬼嶽さむきやまひ　舎咕

関ちえて　宝も嵌しろとさう　代　宗祇法師
美濃国関とのふ所乃山寺の嵌の
咲さうを見て　ゆくしなかや
芳聖出て布を賣をし　文衣　杜国
麦ゟつや　内外もなき志賀の里　重五
あしゝ雨をかくまぬものや　俳田の檜　芭蕉
瀬乃　あまさりけり　あり　雨　去来
牛もなし　鳥有乃　ゆくりのあり　一髪

角田川にて

いさのわまと　浅嵐の船今のまゝ　貞室
みよしゝ　ハいりに　秘さう　貝ゟ書　破笠
いさとゝひも　まさしきの　形代　芭蕉

夕月や杖に乗なる角田川　越人

九月十三夜

唐士に富士ならべけふの月も見よ　素堂

鴨突の下やりなる羽田哉　胡及

鴨突ハ萱沙乃ひまのむきこ哉　渕支

武蔵野やいくぶりもとる時雨　舟泉

淵を見根から見せんむらしぐれ　尚白

かく時やこゝ見りけりせて初しぐれ　洗友（イヨ）

むさし野とおもひ人とみる月あしぐ　洗悪

ゆいらしと生海嵐を横や小のる奥　俊似

みされの狩轆轤やを乃くおく　一笑（ツシマ）

雪の富士菜ゑひとつにかくれけり　湍水

よしの山も峰大きすぎ夕かすみ　飛水

里時のやとを見よとや鳴かる　芭蕉

飛るの月や不破の山家の煙掃　如行

旅

雲雀より上にやまとらに続くな　芭蕉

大和出平尾村にて

花の後遥に似たる旅に寐て　仝

株咲里を眠りて通りけり　夕楓

月乃入や舟に見て行桃の花　一髪

のとけしや湊の茶乃生きるなり　荷兮

ひと河猊てうしろにおひね衣之　芭蕉

ゆる人の餞別に

わくきに涙おさへて笑ひけり　徐風
寝人ゝ奴に合賛宿を明やらき　冬松
蚊を出るにうちに最明に旅寝　昌碧
の月雨や　柱月を出に市の家　松芳
夕立に その大名ゝ　一歩かり　今下
芭蕉を見る
稲妻にさしつきぬる別かな　汚雪
なきして後にすゝる　秋の蛾　一井
秋風に少かねとる　つゝる是　飛水
旁されよさゝ成座に見へ出を　嵐緑
さしも月に行人ゝにむかひて
更級乃月に二人に見ゆるとり　荷兮

越人旅立けるよし時て京よりやつらに
月に行　後ゝ　ほかよ　一るのこ人　飛水
わくらまつ　わくらまつとて　本書付秋　芭蕉
味乃葉のこまもちり行　秋のいか　路通
狩野桶といふ物　其角乃とゝもむけに
わくらとて
狩野桶に庶を多門けて秋の山　荷兮
とゝかりし　稲をかりしかりけり　京ちね
入月に今宵りし行　とまりし　玄寮
秋きけい　親舟　ゝつきねとし　一井
品川にて人にかりくとて
淳庵の墓をつゝるまの秋の号　文鱗

草花ぞも 志へるう疾るの変
旅なれぬ刀うこそや 村志くれ　芭蕉
明海出て 芭蕉よ不無ゆて　常秀
いく 落葉それかと神もたこう事
夢に見し 羽織は綿の代ゆり　荷兮
甚角にコウゆ時　曲水
ひさ多門でひとりたる冬の宿　荷兮
天花てさうれ多まん 雪乃暮　越人
から風の一るに見て行ちとりに　今下
里人のまうりゆ もし乃雲　宗因
越人と吉田の祝まで
寒けれと二人 旅寝そこのりき　芭蕉

旅寝して見しや浮世乃 嫉妬　仝
述懐
家房を捨て出る附
きゆう時は氷もさえてもしるし　路通
子成 獨り守りて田を歩嫁りぬ　快宜
余石乃田ゆん 蛙入ぬる浮世に　落梅
言歸ゆて
小夜ゆに さ小さ 仙けり奥の院　杜国
さくら見て行あらりたる人食に　梅舌
言歸ゆて
八父母ゆん 志きりに 惑し 雑まの変　芭蕉
いやや先 さ江 彩さ人よそのついてに　荷兮

きうふ入湯をのぶいたり　一盤　仝
一本乃なすひもひかゝる住居ハ　杏雨
肩衣ハ縫子にてゆるせ玄の友　杉風
似たしや　白髪まかつく麻ま愛　亀羽
九月十日　素心の亭にて
かくれ家やよりも菜の中に残る菊　岚守
うつふ家を貪るきくの　頃寝ハ　暁梧
人乃　庵をとろねて
されハとそいのまてこたまくの宿の宿　芭蕉
四里乃　人にいひつゝハ
おつかしの落葉にやあるにいひハ　杜国
鎌倉建長ちにまゐて

落葉かく　身ハつゝねせなかふ　越人
ゆる人のもとより　目をのやとて落葉をも
一ツ続送し　秋て
あいまなる　落葉に　燒や鳴より　荷兮
古ろ乃る思ひ出す　曉に
たゞちゐの　暖甫や冷ん　冷の変
楕の火に　親子ハ　豆ハ　侘ねハ　嵐潭
目や遠う　耳ハ　ちかよる　しの雪　去来
ふるさらや　腋の結ぶ　年乃雪　西武
きあしのうつを　おもふ　年の雪　芭蕉
　　を　まゝ　て　鬢先に　かゝる　除風
行年や　親に　志らかをうしなう　越人

哀

春秋世に 辺ある人の 素白ハ
きぬくや 余乃ゆゑ時 時鳥
故会 出て 藤原又ゝる 別れハ
却し千の 国にゝの 枕 ゆゑハ
思千に 小柳ゆゑて 見る 女ゝ
さらけゆし 妹ゝ 恒根ハ荒ハけり

宮殿黒ゝ顔色

霄閣乃 稲妻 消ゆゑ月の 影
一やゝり 人待ゝ ぬるゝ ゆゑ

さひしきわに

浅夜なりと 家ゝや 人 思ゝ 花

一有妻 除风 長虹 文瀾 冬文 心棘 長虹 尚白 荷兮

しりなるゝ 落に 明るつまゝア ハ
妻の名乃 ゆゑハ 人 祐送り
杰乃津 志くゝ 旅乃 よゆゑハ
物ゆゑ 火燵を 明て いりなゝん
うゝ 家に 火燵 消るゝ れハ
山畑に 夜の 思ハ ちや 芸川
きぬくを 裏 見ゆゑて 寝りけり
おそろしや きぬくの 比 袖 あゝき

吉常

末頼に

芸ゆゑ花を 南無 阿陀 仏文ハ

世常迅速

小春 越人 俊似 舟泉 岚蓑 松芳 冬松 昌碧 守武

咲けり苔のひなきけの留れ　仝下

東都府

南京や空さへ明のかくさき寺　堺元順

松坂の浮鯨といふ人の身まうり

みくにふいやりける

橘乃出かり　顔見ねだりと　荷兮

いまうとの追善に

夏のうへにかなしく消る常なる　京去来

ある人なうしなられる時中堂に

ひさ顔乃山瓜と見ゆるちきりに　荷兮

世をさやく妻のこまりける比

秋吉月の桐乃一葉と思ふ人し　野水

辞世

ひのうきかりし　焼は秋一ツ主工夫

子に於くしける比

似さ顔乃あらハ出てこん一躍り　落梧

一原野ゆゑ

まく雪や小町ゆゑねの見るのさま　鈞雪

妻乃追善し

おもひ出へし志ての里人それなのむ　自悦

屋ゆゑ妻乃こまりし秋いさみて

秋ふきさやうさ人ひえゆく北面し　去来

工夫舉まりし後

持乃人の新さ人なし秋の暮　其角

母に於くまけるまゝ乃表まを
於きなみやまとり合くに秋の雪　尚白
ゆる人の追ひ出り
埋ミ火もきゆやなしごの宮ゐる雪　芭蕉
旅にて身まうける人を
あハ雪乃ふくうぬうちに消にけり　岚蹄
鳥辺野乃ふるや念佛其冬の月　忍　小春
釈教
伊勢にて
神頃や於もひもらけを涅槃像　芭蕉
負て来る母おろしけり涅槃像　岚蹄
西行上人の百葉忌に

たゞきりとあ明のとるさあらん　荷兮
於孔し遠忌に
連翻や千里日と志れれけり　胡及
うて首に蜂の巣かる二王代　松芳
木履をく僧も為けり雨の花　杜国
沙まうねを扇てさく花の寺　冬松
花に酒僧とも俺ん塩さゝれ　其角
負言をつちの人辰の巣延生一日
東照宮の別當僧正の住房に慈恵
大師迁座執の法華ハ薄の侍る
よし貴人なれハ独ゆかにまうて
序品のあるを

ちゝの死のなのりそうむ　越人

文庫の徳冨記ちと覚えそ　同

時き許あり社の威徳乃至

あのひむぐ巣うむ寺のしけ是ハ

なりくと落る涙や夏の滝　会

観まち尾上の稚竹よけり　俊似

古寺やつゝきぬうねり乃草草　一井

八湯あて

海士の家聖とよむ　千閣

咲よけうあんる寺の釈迦　一井

夏山や赤湯ふの仁物　藤葉

奈良あて

潜仏乃貝ホ牛ふれあ庵のふホ　芭蕉

潜仏の寺演　清一　ちよくさね　尚白

こる柳あて

腰のひのき徳ふ　一雪

垂ホ末て庵一日の　清あホ　笑

十如是

おのふのなうまそ通るあふホ　荷分

即身即仏

夏、陰の至ふ露ふかんの仏ホ　思益

あるろひや像のふる衣　嵐蘭

おろくやつゝそあるふ陸奥桃　荷分

村のホのひまろ町のるまよ　探九

石竜に旅隠鬼の柄のふりれば　文里
魂なり舟より酒をまゐりけり　亀汀
たゞまゐりたゞまゐくる世蔵に　卜枝
松待乃柱見さてん　雪の法　狗雪
平等旅一切
松待まゐり人をとゞめけり　俊似
稲妻に大仏　松かむ　郷中に　落丁
恒越に引摩　猥く大きな　に　卜枝
ある人四時乃て来物なりしを乃窮と
前を不会不図手紙を感して乗り
厚せんとに
鳳くはね仏にはなりはねて　荷兮

ある寺の奥行に
燕も　此寺乃敵かうて　其角
すみ出て坊を松かしや月の舟　一井
神乃子に来神をうくる法師に　卜枝
人のもとにありてとち出んとしけるに
まさしくれたまへ
夜に忘て又たゞしかり　一時雨　嵐弾
鎌倉の安国倫ちにて
たうときの涙や直に祈るらん　越人
古寺の雪
曙や　伽藍くの　雪見　思ひ　荷兮
月

如寒去 沈穴
如稀去 沈衣
如商人 沈主
如子 沈母
如渡 沈舟
如病 沈医
如暗 沈花

雪れやかゝる二王乃 伝統 俊似
ほくり盃であはされもせし雪仏 一井
弱霜をる人乃きゝりや淡さ花 文潤
子親のうるもうせ早し年の雪 其角

藥王品七句

まつ白に梅乃咲とうこなみに 湖及
雪乃月や 海棠捨ふあまの家
双六のあひてよひあひつゝりに
行とそく おけいとりつくさけに
月の須 濃乃 榎にきりかけり
うゝくとき清れ見付る山辺に
秋乃花や 松ひ[illegible]に起さるく

神祇

古宮や 雪まゝる かゝる 柳の花 沈雪
二月 女 又日 女 病し
きさらきや 廿四日の 月乃梅 荷兮
まんくと梅ちり かゝる 庭に 仝
常もあひて 来よ 神の梅 亀洞
上に 恋きはゝぬ やうに 神の花 昌碧
鶯の 聞まるなりけり 鶯の中 沈雪
何とやらわりあひ 寒し 梅の花 城人
賞へなく あさまをきうる 神の梅 舟泉
月代も 志しるかとあり 梅の雪 雨桐
門ひつゝて 梅の 濃の 鶯 おりくとり 重五

絵写見る　人れ後乃さおぶれ　玄寮
花に来て歯朶かさり見る　袖に　鈍可
宮の後川渡り見るさおぶれ　李桃
川手洗の　本家の　沖乃　蛙なる　好葉
ほとゝきに　神楽乃　沖成通りけり　玄寮
笑等の灯をつとくる　火串なる　亀羽
破扇一度にかなりに　川後なる　未学
川原まで瘧まきれに　川後なる　荷分
おりしも里乃子　覗く神輿なや　尚白
此月の事に屋ちかにあまれに　松芳
冬さんや　祢宜のさけさる　沖胃　落梧
若宮奉納

きく知らぬ　おもも妙なり　神くらに　利童
臨の方と寝　恵に秋のうくふれ　野水
袷麻川　夜明乃　旅のうくふれ　昌碧
かつらぎの神にふきまき　庭火れ　村俊
撫杭や　川後なる　蝶とふひ　卜枝
祝
肩付ハいくよりにかなりぬ　宋し　冬文
荷分四十の事に
幾喜も　行き侍に　見ゆるなる　重五
君が代やみなくてあきおつさき　越人
青ハ何かとも　沖の石　今下
いきゝ　五の上に　杖つらん　亀洞

千代の秋にあひにあへり宋　日

青ゝかくれ居る人に中無所

先祝へ　梅を　公の　冬已あり　芭蕉

大井川を知るべく作田塚本氏の

もとにとまりて

さくらはれのうち吹かせ大井川　芭蕉

うゐの山にて

さくらはれや梓にふきゆる千鳥子　左柳

春月西にあてあつかはしく弘　里東

青白に麻の星もや　五月雨　江戸　楚舟

曠野集貞享

詩の行をたもつきに無くたまつる市中にいりて物乃けしきを

見無く我東羽乃櫟にあてたのおろかはとれせはとにかくて

佐川田喜兵のよし此山にはまかしといへるを実にかんきを

又雲客し居ゆ思へとうちまこれ此句尾陽氏世ゆるの

作にて芭蕉翁乃作人し我なをさるに聞しにさいつ所

田世人居をうつして実に此句我感ぬしなりしなりしあり

ける人其中に虎の物語せしにとゞに近まとる人にいりて

独立を変しるよし宮のおわふへからさるものなとし

猿を聞て実にゆる三洋はなることいへるも実乃宇老松の

然るをや猶居の句我あらひて

宮をうまれ其に出れぬ居なり　素堂

おの文人のるの法ゆてとらけくれば
三人ひらき戦度も吟して
くるなましかきを峯のうけるに
橋は路も岩とろに甚くまで
あの高川なるおとし笹うり
門の石目行　関の雲とひに
風の目利を　初秋は雲
武士の奪うの山もかと近し
志をりについて　潮の鳴る雲
袋より經とり　出る草のうへ
法ふと降ふまで　ゆる　おら雨
立ち人の李明　李まる　乃出端

水　荷　越
分　人　水　分　人　水　分　人　水

千ゆいとるむ　北山のてら
蜷まるとら　一重樣も咲のこり
ひてともなき　夕月夜　如事
露の身に流のやうなる極異
秋をなをなく　盗人の妻
明るやら　西も南も　猪は変
さゆうなりたる　利根の川船
冬の日はてかくとしてかき曇り
函るかけ　行と相識うちなきて
ふらくときのふの市は塩なさ
狐　法きとや人の見るふらん
柏木の脇もの頃はつくしと

分　人　水　分　人　水　分　人　水　分　人　水

きくやく夏乃みな咲のえいる　分
月の影より合ふけり　辻右撰　人
秋になるより　里の酒　酒涌　水
雨しく是此秋にゐる雲かけて　分
晴しと云ひ　不破乃　芳化　人
かしまする　詠に演ぶれたし　水
火着乃ねてまれ　いつまこ　分
かくれもの　見せられ人の立かり　人
乃せんとゆて　池の久とり　水
花きりり　粉もいまこ　定られ　分
捨て　甚ふる　年加怪　なり　人
墨そめハ　正月　とにかきれて　水

大根まぎて　干ふ　いそがし　分
遠流や　浪に　出めされ　惻しり　亀洞
さるの舟乃ふ　酒の　なりき里　荷分
のとけしや　早き酒に　荷を解て　昌碧
百足乃　懼る　葉さた　けり　世水
夕月乃　雲の　白きをうち　泳　舟泉
秋雪乃　簑を　裾に　引きを　海雪
萩の聲　ととも　出らぬ　雨そや　茅
一沈るして　ときも　古徐　亀洞
逆の音に　立暮しる　宣称る麻　荷分
楽まる　須と　おもふ　筆　栄　昌碧

ひくとおもてゆらくに庵造　釣雪
湯殿まいりのもめむふりする　舟泉
涼やと筵をそへる川の端　此水
あふさきれや行る月　荷兮
秋風に女車の髭おとこ　亀洞
袖を露けき浅漬乃汁鍋　釣雪
時くしものきんくらぬ花のさま　昌碧
八重山吹はちりちかうくし　此水
日のいそやけぬへ何せん膾に　舟泉
此やまけりに出まふかなり　亀洞
向まて窓やるかたの小あゐねて　荷兮
垢離く人のいそまの番　昌碧

硯所にて千鳥の加蔵皆えいく　釣雪
高くうれある辞ちかきそく　舟泉
むく起に物のひつけて赤膳り　此水
門をきわ鉛るよひとひ　荷兮
りつまへて足腰町乃荻原し　亀洞
たのみ道寄りとともするぞ流　釣雪
雪ゆきつきるそうろ乃ゆだの月　昌碧
やくしの秋乃やくいつきなる　此水
つまのいもち松かさ帰る寮の窓　舟泉
力まなき宇守まき安房け小湊　亀洞
夏の月や見たるに流乃座りて　荷兮
桶のかつぎを入しまひけり　昌碧

人なきに照るさしてはなれ　狗雪
ついとうくりに　落る　精く在　舟水

美しき　鯲とまさけり　喜好あり　舟泉
柳乃とうけ　うまのきりの　卯　杏芳
夕霞　澄物とうて　うへるらん　冬文
雲にこれやうに　見ゆる月　新　荷分
秋草乃　そてもなんと　咲これ　松芳
弓ひきあくる　勝　お撲とて　舟泉
けにも又もの　捨ひとうち　出る　荷分
あまりく　砂の中に　木のもし　冬文
火鼠の皮乃　衣を　着まさく　舟泉

涙見せしとうち　鯲ひ　泣く　松芳
うるわんより　踏まつしてを　落まれる　冬文
酒は　半に　膳もちて　あ河　荷分
幾年後　順禮も　せん　寄しき　松芳
よまて　双紙の　絵を　先に　見る　舟泉
なにるのもうち　志めりくる　花の　奥　荷分
月の　眺や　飛鳥井　乃　君　冬文
灯に　夜　おかひ　川く　まの風　舟泉
数珠くりうけて　照鳥たう人　松芳
澄辰も　入　歯に　洋の　志へうく　冬文
十日のきく乃　わしき　るのかり　荷分
山里乃　秋ぬらしく　生鯲　松芳

長持ゆゑて かくるやく きむ　舟泉
きふくとなりまを渡る月の影　荷兮
るのとをれハ るのいかくく　冬文
さひしさハ 雲井の宿乃みの雨　舟泉
莚ふまへて 落る夏 いかゆつゝゆ　松芳
洋ゆくや 諭きる身のうきまく　冬文
曉ふるく 梶婆 品 よむ　荷兮
けしの花とり雨ゆるにちりかり　松芳
味噌まる 青乃 漬さへ かし　舟泉
黄昏乃 門さゝけに 粥あり　荷兮
次来くに いのこく うに かする　冬文
春乃ね 赤貝 とれて いのこく 鬼　舟泉

顔見に もとる 花乃 旅立　松芳
きさゝぎや 墨布を 雲に 雨をとめて　冬文
そらぶりしろき 山口乃 家　荷兮

ほくきに 待ぬ あらしの わもゆり　荷兮
雨の 前 雲のよさそる 戸 雲 口　此水
引まそし 車ハ 琵琶乃 うたゝ 也　仝
いのふきうなくも 人乃 かゝうひ　荷兮
月乃 秋 旅の 志さきに いのふ也　仝
一 花 ゆるひし 家のきくふけ　此水
初 いのふし その世の 家の 坊ゆ 丹　水
葉畑 ふ 田 ゆとよもりうけより　兮

土肥を外しにうき よろしく
下削あしく 神も女のうき
通ひ路雲へありあけて逃くり
六位にありし 息たりうへきさ
代家りさやもりし 情雨ひて
錢一貫よ 鰐 一第
月の朝 掌けきにのそくらん
天仙藝に冷含めさし 土用暑
若咲けりと 公 まのかなり
かけりね うけよ 香煙の中
たく人啼かりて 鳥猫らちせり
夕せりき 酒 つりて やる

仝水仝亇仝水仝亇仝水仝亇

初のやと 肥白く佗残けめ八甲変
秋のにしみに 背 浄瑠璃
染てらくもよられにけりじ生き魂
八日の月代 すきやいつもまて
山乃端に 松と明との峯うかる
きつまきみ乃あよ人ぶりくもさら経
暑き日や 俵うけもう山寺へ
太鼓さぶに 僧よ のか経う
あろく啼く露くう 古俳の草枕
気さその よきや 鶯にかゝる
忍ぶとも 恋しぬ 顔にて一二年
庇をつけて 行き居うつり ぬ

水亇水亇水亇仝水亇水仝亇

三方の数ありしを少にくふる　仝
世を乃草鞋を給人を花あし　水
隠しや　小　大原　嵯峨の花　仝
人おひは行　ちる乃　川原　単

月きしのわらけしまい居乃男もなくする
おりしさに柄をさしこゝらよき周也
宮鑑法師乃旬をすゝむしなとに交乃
我乃疵ゆゑにまを千倍もやまぬつきぬ

月に柄をさしあらんよ花周ゆ　我人
故乃おもしろ百姓の我が疵　今下
とゝくりを詳う置うへてあらゆらん

おもひうけるまき風ふきのそら　仝
真木柱つく人おさへてよりかゝり　人
仗乃ものに返るのまとまる　仝
ひまきあれと猶乃ものを選う柄に　単
としあくるまでいかうとけり　下
とおくやらふまれ前見せて柄思ひ　仝
まゝおもさけに流ちふ後　うか　人
大勢の人は法華紙あなされて　仝
月の分に　物羅　縄　うり　下
哈に柳も又哈に柳も笛浩し　仝
我乃けしきり　畑見る　客　人
コウまゝにいつう世世を肖くへき　仝

海ちゐなりとふ　古乃比の　月　芭蕉
歳ちうま　詩窮屋にめてつらん　仝
理をせしなれとる　秋乃夕くれ　越人
瓢単乃　大きさ又石とうりこ　仝
風にふうまて　帰る　市人　芭蕉
かうにおとも　長安ハ是名利の地　仝
園のあわきさいそ　月くるかしけれ　越人
いそりしを　師是の　空に　立却て　芭蕉
乱とり　世話やく　寺の路とり　越人
此里に　古き　玄蕃此名をいえ　芭蕉
足於ちをぬ　雨の　いのけかの乃　越人
きぬしやいのあり　ゆかもくいのてやふ　芭蕉

風却きゝあまふ　鮮乃うつくし　越人
ふもつつに　是乃　脇もすくすまぬ　芭蕉
物いをくさに　舟　路なりけり　越人
月と花　比ちの　二ツ根を北すして　芭蕉
雲雀さんつるおろの　肌　ぬき　越人
彼是戸乃　釘うち付る　まつ乃　末　仝
見せハさひしき　麦乃くまきハ　蕉
家なりて　投げにつゝむ　十寸焼　人
ものおもひ居る　神のの物いひ　蕉
人言て　いまさ　法印の自ひける　人
初彫に　鍬る　堂乃　戸隅　蕉
かくしきに　嵐此あるく　雲中に　人

恒積乃さらけ　霧ハ　あれて　蕉
いやかくに　妹ハ　夕なりめ　人
あの雲ハ　とり　涙　つゝむ　そ　蕉
行月のうちの空にて　消さうに　人
砧も　遠く　鞍に　いね　ふり　蕉
秋の田をうらせぬ　公ものの長ひきて　人
さいしなりら　文字　問に来る　蕉
いりめしく　尾　庇の　木葉　巫　人
池辺をまるに　窓　痩て　ゆひかき　蕉
花乃須　淡義　糸もうらやまし　人
田うしを　哈みて　腥　きゝつち　蕉

翁に伴なはれて来る人のあつらしなに
落ちたて　大の分け　文や天陰ノ　其角
三　秋さの　月見　雲なりけり　越人
菊花の　座に　来を　門ひりて　仝
欲てつまるく　藁ハ　名になる　角
詩り　来て　絹に　なけるる　友　衣　仝
歯きまりまさ人　わり　つまのう　称　人
恨ミとる　涙　まゝふとにとまりて　仝
静　山　茶に　貢を　さく　むる　角
空　蝉乃　新　魂の　姫の　松ましき　仝
あとなりける　金　二万　両　人
いとおしきものを　他人とも　名付けり　仝

風けとうをしてたしつゝきうる
海熟き耳につきゐるさ見と
魚をも淫らぬ月乃江の舟
おもひいろの富士は淺黄に秋の雪
れとさしゐる草の一瓶
漫詠をうれしき神に淫こゝる
うき世につけて死ぬ人は横
西王母東方朔も月より見れ
よしや鸚鵡の言のこしうき
いちたなや戸にたきゐる衣の妻
其乃親とも産れたのまん
やゝれのひ寝りしねらまれ折れて

角 仝 人 仝 角 仝 人 仝 角 仝 人 仝

宋淫くさるは師走なりけり
夕鶴宿乃長さに接のとろ
いくつ乃世を荷ふ清力
穴いちに塵うちたらひ萬枕
ひいるうさうて伊勢の八穀
満月に宋断されらを涌るゝ
念着法師は秋のいきうせ
夕まくれまさらふめき寂る蓑
弓きひとる寒かけのまと
みたとに乞念の法守頃のひて
ものきくいうね一る士の闇うり
花の香にあき淫き眠こゝうし

角 仝 人 仝 角 仝 人 仝 角 仝 人 仝

むしろ愛へき嗔續乃 圭 仝

我もうし新酒ハ人の裡やまた 岚雪
秋うそ寒し 山川も湯腦 越人
月の宿 書紙引ちらし伊中にねて 仝
外面葉の 草をけれ 行 雪
まねあひて牧にまつらぬ里のる 仝
川越くまハ 城下のみち 人
疱瘡皃の透通るかと歯の皃 仝
帽前ハ知らぬ 茸 むそりやる 雪
なるゝ見るまるれくのうき雲に 仝
後そひ よ人といふうそりなき 越

そ朝よりも仲あけまるむさ手に 人
行燈もうて 人紀 浪人 岚
美物を積ようてゆく 一ッ 悦 雪
明日ハ髪そる 霄れ 月新 越
志ら雨の群と 泣かる 女客 人
つまなの医者れ 後姿也 雪
ちらぬれに 日ハくるれども 長此 越
よふと鳥とハ 何を いふらん 人

初雪やおとしのびたる 桐の木に 野水
月のみしうきゆく 冬れ 鈴記 落梧
山川や 椿の唫物をさうぼらん 仝

賤をなぐさ見るへうけり　此水
おもふさま　押合　月に草刈に　仝
ひらとくし　長　樋の荻　梧
川越の岩にさまれ　秋の雨　水
ねぶといふる　頼乃　きこちき　梧
つゝせこをつゝなくかくに　椽の下　水
すゝきあるに　頃乃　うきとひ　梧
更る夜の湯ハむかしを願て　水
おそくり　起ま　和住乃　僧　梧
蒼の蒼ひちるひらうを見おさう　水
旅まるうちの　公寿　麗さ　梧
京にてあるまものこゝあとも一文に　水

下戸ハ皆いく　月のおわろけ　梧
耳や蓋やようても花の粉なれ　水
具豆めさせにけふの　初午　梧
いつやらも蒼　雲ね　此おくに　仝
山伏住て　人ありる　なり　水
くらくとくさひぬけるる宋車　梧
桃灯るてあと　くらきるれ　水
何るのを泣けん　髪を　振おんひ　梧
ありく　物もいふね　泣れなき　水
もろうしをいやうるうにうきのせて　梧
かる府中を　飴ねつり　ゆく　水
雨やこて雲のちきるくおりろや　梧

柳ちるうと　例乃　莚　尼　水
朝なうく月こそさいれ又する　仝
寂しき秋を女夫居りけり　梧
占を上手に先さるうらやまし　水
黍もてもやはいかしへの酒　仝
朝ことの千巣備るこう頃に　梧
詩より花を先へ見てとる　仝
春雨出くらかり沫おえさまし　水
祢かりおろ人と雲雀鳴なり　梧

一里乃歳賣ハいつ　冬の花　一井
うきひの先の籠冰る朝　嵐潭

きれくさや正味を引に誘ふた　胡及
肩衣もらまし　酒に　よふ人　長虹
夕月の入きし　早き　塘きハ　嵐潭
ゐはらに鄉を洗ふ　あむ　秋　一井
里流く　踊　春の　二三日　長虹
宮司ゟ妻に　かまらまて憂　胡及
問ハまても　涙に　ものく　云わくき　一井
蔦の話とまて　切かしく　文　嵐潭
うとくと寝起なるに　湯をうに　胡及
空ゆく　秋半の　越の　雪秋　長虹
なにゐりよりいひてハうち　嵐潭
拾うハ　みな　女中なり　一井

浦風に 脛 吹まくる月涼し　長虹
みるもかしまき 紀伊の 四実屋　胡及
若者乃きし 実射て 打る 花の陰　一井
蒜 くらふ 香に 産さりけり　嵐渾
たるのくれ 行りきくを 睡ぶん　胡及
寄子乃 縛の 裾に 落付く　長虹
たまりしまる 間もさいく 手段洗　嵐渾
聖愛 かとゆる 好屋を 拘けり　一井
床ときこにあるうなし 松の枝　長虹
秤にかる 人く 乃 奥　胡及
此年に なりて 灸の 焼もなき　一井
まくらも 甘に 洗い 寝 入月　嵐渾

蓋るて 漆子の 語のうち 雲紀　胡及
おきくるやうに 志れむ 萩の葉　長虹
四方の 横 入 月の 宮のうちなけに　嵐渾
衣 引かゝる 人の 豆 おと　一井
毒なりと 瓜 一きれも 絵ぬと　長虹
庄風 たちて 乃て 白 西　胡及
板 屋きて 鴨 所なき 度の内　一井
まねのぬけ たる 黒き 唐 丸　嵐渾
ぬくと 日 足の 知まぬ 花白雲　長虹
つきこ 泥 あり ハ これつくし　胡及

元禄壬申冬 許六亭奥行
けふ たかり 人も 年 れ 神しくまし

大千歳

腰ハ仕付ける 壽のあら出 許六
油実成うどん小粒の冷味して 洒堂
汁のあへたり 杭の風 大丸 岱水
宿の月 奥へ入れと 古 聖 嵐蘭
先ゝ文 すゝる 坊屋の狗ゆう 筆
ウ 戈たりの傍半中に 猶まれて 行
焼焦(コカ)しける 小麦もこ消せ 翁
糀のつむさの 蒸さを 明るさう 六
娘(テ)礫(カ)成のわるなりの入に 堂
半分ハ 猩ハ 人もうち 交里 菜
紀進のけく 猶のくひ 飽き 水
青晴ハ あらふる 秋の 気遷し 翁

小ぶり 蒔の風 そよ 紀ゝけ 六
八月ハ 後面 小 拔 紗 堂
焼山 志えの 重の 示 ゝけ 菜
打かこは 島も 花の 朱 絵 あて 水
洗ふも 長つ 赤子 鶏の 卵 まふ 翁
青深く 隠 者の 留 雲 あつしや 六
南 麻の 巫と 沸 ゝ 解 する 堂
さ 洗 ゝ 鶏 一 本に 年 ゝ 蒸て 菜
赤 花 ゝ 如く 也 特の うへ 水
灯の 新 めつ しき 甲 待 子 翁
山 わ ゝ 山 成 出 る 夏 六
児 生 ハ 鮎も 志 ゝ 鶏 ゆる さ れて 堂

天保十一庚子林鐘増刻成

秋州菴藏